玄朝が描いた不動像の模写図
（京都醍醐寺蔵）

一方の空海が作らせたという東寺の不動像は、彼が唐にいた頃に当地で好まれていた像容であった。どのような経緯でその形ができたのかはっきりしないが、先に述べた善無畏が描いた原初の不動像を威厳のある姿に修正したものともいわれる。空海はこちらを採用したのである。

しかし、やがて唐が衰退してその影響力が低下し、律令制から摂関政治に時代が変わると、国家鎮護よりも貴族の家門繁栄が優先されるようになり、そのための護身仏として本来の不動明王の姿に戻そうとする動きがでてきた。つまり、玄朝様不動明王像の復権である。

というわけで、今日、弘法大師様と玄朝様の二つのタイプが共存しているのである。

弘法大師様像の顔

東寺には講堂の像のほかに御影堂にも不動明王坐像がある。こちらは堂々としていて気品があるとよくいわれる。しかし、その顔を見ていると、額や目など鼻から上は忿怒像として

の気迫が感じられるが、鼻から下が寂しい。上の前歯は下唇を噛んで怒りを表わそうとしているが、唇を噛んでいるというよりも、口を閉じたときに上の歯が外に出てしまったというような、なんとなく締まらない感じがする。なぜそう感じるのか。これは鼻から上を隠してみるとよくわかる。ちょうど、下の歯がなくなってしまった人が噛み合わせをしたときのようである。それは下唇からオトガイまでの距離が短く、下あごの高さが低いためである。

さらに、この像の下顔面が寂しいのは、牙が口角から左右下向きに出ているが、口の幅が狭く、左右の鼻翼から口角に走る鼻唇溝が下がっているためである。怒りの表情というよりも嘆きの表情のように見える。こうした鼻から下の造りによって、御影堂の像の顔には不自然さが感じられるのである。

京都東寺御影堂の不動像
（平安時代）

この像と非常によく似た像が滋賀の大林院にある。この像を模刻したともいわれるが、下唇からオトガイまでの距離が多少長く、下唇を噛んだ口元の形はずっと自然である。

することで上下の歯は互いに滑ることになる。植物を食べるとその線維がそれによってすり潰されるのである。鴨竜たちは下あごが開閉運動しかできなくても、上あごのデンタルバッテリーがわずかに側方に滑ることで現生の草食動物が行っている下顎の臼磨運動と同じような効果を得ようとしていたのである。

トリケラトプスの全身骨格

トリケラトプスのデンタルバッテリー

デンタルバッテリーがよく発達しているもうひとつのグループは角竜類である。その中で人気があるのはトリケラトプスである。先年わが国でもこの恐竜の起源とされる原始的な種類の顎骨の化石が発見され、体長は五、六〇センチと推定された。前期白亜紀の地層から見つかったというが、トリケラトプスが生きていたのが後期白亜紀の末期なので、そのおよそ七〇〇〇万年の間に分化して大型化したようである。

トリケラトプスは大きな嘴をしていて前歯がなく、そ

の奥にデンタルバッテリーが左右に並んでいる。それは小さな歯が何段にも重なっているが、鴨竜類ではその歯の重なりが数列縦隊をなしているのに対して一列である。つまり、歯根に当たる部分が二又になった小さな歯が次々に積み重なって一つの柱を作り、それが臼歯列のように前後方向に並んでいるというものである。つまり、鴨竜類のデンタルバッテリーは幅が広いが、トリケラトプスのものは幅が狭い。一番上の噛んでいた歯が磨り減ると脱落して下の歯が噛めるように全体が徐々に生え続けるという。歯冠にあたる部分は鴨竜類では竹を斜めに切った切り口のように先に丸みがあったが、トリケラトプスでは先が尖っていて、外側の部分はエナメル質で内側は象牙質である。そうした構造のものが下あごは舌側から頬側に湾曲し、上あごは頬側から舌側へ湾曲して生えている。

トリケラトプスの噛み合わせの様子

ニューヨークの自然史博物館にはトリケラトプスの骨格が口を閉じた状態で展示されていて、噛み合わせの様子がどこからも見える。説明によると、上下のデンタル

ついたチョコレートが目につく。

そこで、このウィーンと関係が深い音楽家のうち、主にこのモーツァルトとベートーヴェンを取り上げ、彼らの歯がどうだったかを見て行くことにする。

モーツァルトの虫歯

まずはモーツァルト。彼はザルツブルクで生まれたがやがてウィーンに出て、そこを拠点として活躍した。幼い頃からザルツブルク宮廷の楽士だった父親に連れられてヨーロッパ各地に頻繁に演奏旅行に出かけたが、その間の彼の様子は父親や彼自身の手紙によってある程度知ることができる。そこには生来頑健でない彼が過酷な旅で体調を崩し、さまざまな病気に罹り、歯の痛みにもかなり悩まされていたことが窺える。そして、リウマチ性の病気が彼の生涯を通じていつも関わっていたことが注目される。

モーツァルト六歳のときの肖像画

一七六二年、六歳半のモーツァルトが家族でウィー

ンに旅し、宮廷に呼ばれてマリア・テレジア皇帝一家の前でピアノ演奏し、絶賛されたことは有名な話である。これはピアニストとして華麗なデヴューであるが、父レオポルトによると彼は旅の途中でひいた風邪が治りきらず、体調はよくなかった。その夜、発熱し、両方のすねと肘、尻にコイン大のやや盛り上がった赤い斑点ができ、触るととても痛がった。そこで手持ちの薬を飲ませ休ませたところ、一週間ほどで収まったという。これは今ではリウマチ性結節性紅斑と考えられている。一七六五年にパリからオランダに向かう途中でも同じような症状が起きて、治るのに二週間ほどかかったという。また、翌一七六六年、ミュンヘンの宮廷でピアノ演奏したが、その夜から体の具合が悪くなった。四、五日すると高熱が出て、足の指、ひざが動かせず、痛みで誰も寄せつけないほどだった。睡眠がとれずにひどく衰弱したという。そしてさらに、彼が亡くなる二週間前、義妹によると、高熱と激しい頭痛があり、手足が腫れて痛みがあり、曲げられなかったという。これらはリウマチ性の多発性関節炎とみられる。こうしたリウマチ性の病気はいまではよく知られ早期に治療されているが、実はモーツァルトの命取りになったのである。

モーツァルトはよく風邪をひいた。冬の寒いとき馬車であちこちに旅し、食事も非常に不規則であったらしく、風邪をひくのは仕方がなかったかもしれない。一七六四年二月、パリ